

自然環境復元研究投稿規程

(2010年6月制定)

(2013年4月一部改訂)

(2015年2月9日一部改訂)

(2020年2月14日一部改訂)

(2022年1月17日一部改訂)

(2023年1月24日一部改訂)

編集方針

自然環境復元研究は、自然環境の保全・復元に関する学理及びその応用について、活発な討議・研究を学際的に展開できる場である。国内外の関連学会等と連携・協力等を行い、自然環境復元学の進歩・普及をはかり、もって学術・技術等の発展に寄与することを目的とする。そのため、本誌は自然環境復元学の理論から実験、調査、計画、応用技術、社会的合意形成にいたる幅広い研究や事例報告を掲載し、研究者、技術者、行政、企業、市民の交流をはかる。

投稿資格

投稿原稿の著者は、会員に限る。共同執筆者には会員以外の者を含むことができるが、責任著者は会員でなければならない。なお、編集委員会が認めたときは、会員以外から特別寄稿を受けることがある。

投稿倫理

投稿する原稿は未発表で、他誌に掲載予定のないものとする。投稿前に共著者全員から投稿への同意が得られている必要がある。

原稿の種類

原著論文：新しいデータと分析、またはモデルを用いた独創的で完成度の高い論文。

短報：「原著論文」としての完成度は要求されないが、新しい知見や方法、独創的な理論についての短い論文。

総説：自然環境復元学分野の論文をレビューし、当該テーマについて分析・概説し、考察したもの。

提案：自然環境復元学の目標設定と実現方法に関する提案と、その論理的根拠を示した論文。

調査研究報告：新しいデータを含む調査や研究結果の報告。

技術・実践情報：現場や活動での事例など会員にとって興味深い情報。

フォーラム：意見や着想、その他の自然環境復元に関する情報提供。

原稿の送信

投稿原稿については、電子メールの添付ファイルやオンラインストレージ、大容量ファイル転送サービス等を利用して、データを事務局あてに送信すること。送信するデータは Word と pdf の 2 種類を原則とする。電子メール等の利

用が不可能な場合、ファイル一式を CD-R や USB メモリーなどの記録媒体で郵送しても構わない。

原稿の受付

原稿は、この規定及び執筆要項に従って書かれていなければならない。この条件に適合しない原稿は、事務局が投稿者へ返却する。

校閲

受付けた原稿のうち、「原著論文」、「短報」、「総説」、「提案」については、2名以上の査読者による校閲を受けるものとする。原稿に関して問題があると編集委員が判断したときは、委員会として投稿者にその旨を通告し、訂正を求める。「調査研究報告」、「技術・実践情報」、「フォーラム」については査読を行わないが、論理展開や構成に関して問題があると編集委員が判断したときは、委員会として投稿者にその旨を通告し、訂正を求める。なお、全ての投稿原稿に関して、掲載が不相当であると編集委員会がみなしたものについては、理由を付して投稿者に返却する。

原稿の受理

編集委員がその原稿を可とし、編集委員長がそれを認めた日付をもってその原稿の受理の日付とする。

用語と制限ページ

原稿の用語は、日本語または英語とする。文章は口語体（常体）で、現代仮名づかいとし、なるべく常用漢字のみを使用すること。原稿の長さは、原則として「原著」、「総説」、「提案」については刷り上り 10 ページ、「短報」は 4 ページ、その他については 6 ページを基本とする。

図・表・写真

図・表・写真は、モノクロ印刷を原則とし、そのまま印刷可能なものとする。ただし、カラー印刷を希望する場合は著者が実費を負担するものとし、投稿時にその希望を伝えること。

原稿の部数

原稿のデータを郵送する場合は、本文・図・表・写真を問わず、コピーを 1 部作成して送付すること。

原図及び電子媒体原稿の送付

原稿の受理後、編集委員会の指示に従って原図（印刷に適した鮮明な図・表・写真）を送付すると同時に、最終版の原稿が入力された記録媒体を送付すること。電子メールによる送付も受付ける。

別刷

著者には執筆部分を pdf で贈呈する。別刷の印刷は実費を徴収する。別刷りの希望部数は、初校送付時に申し出ること。

校正

原稿の校正は、原則として初校のみを著者が行い、第二校以降は編集委員会の責任において行うものとする。

著作権 (Copyright)

著作権は自然環境復元学会に帰属する。図・表・写真、本文、別刷り等の転載については、指定の転載許可願いを学会事務局に提出し、学会の許可を受けること。転載においては出典を明記すること。

規定の適用・掲載・改訂など

この規定は、自然環境復元研究に 2013 年 4 月以降に掲載される論文から適用する。この規定の改訂は、自然環境復元学会編集委員会の議を経て、理事会の承認を得て行うものとする。

投稿料

投稿料に関しては別に定める。

付則：当面は、基本条件内であれば無料。総ページ数が 10 ページを超えた場合の超過ページ分、およびカラーページ分については追加料金を徴収する。

自然環境復元研究執筆要領

(2010年7月制定)
(2013年4月一部改訂)
(2022年1月一部改訂)

原稿の用紙と書き方・構成

原稿は、A4判の用紙を用い本文・引用文献は2段組・45行、1段23文字、明朝体とする。本文・引用文献以外は1段組とする。句読点は全角の「.」、「,」とする。

報文の構成

「原著論文」、「短報」、「総説」、「提案」の構成は以下の通りとする。

1. 表題
2. 著者名
3. 所属・住所
4. 英文表題
5. ローマ字表記著者名
6. 英文所属・住所
7. 要旨およびAbstract
8. キーワード及びKey words
9. 本文
10. 引用文献

原稿第1枚目の書き方

原稿の第1枚目は表紙とし、その上半部には、表題からはじめて、英文所属・住所までを書くものとする。具体的には以下の例にならない記述すること。

表題

(例)

河川における水生生物の生息に関する環境構造評価
山上庄司 □□大学工学部技術教育支援センター
藤山健太郎 □□大学流域圏科学情報センター
Shoji YAMAKAMI, Kentaro FUJIYAMA: Evaluation
of environmental structures for the aquatic animal
inhabitation in a mountain stream

また、表題および著者名に付随する脚注もこのページに記載する。

要旨・Abstract

「原著」、「短報」、「総説」、「提案」には、すべて日本語の要旨と英文のAbstractをつけなければならない。

「調査研究報告」、「技術・実践情報」、「フォーラム」には投稿者の希望により、要旨とAbstractはつけてもつけなくても良い。要旨の長さは1000字以内、Abstractの長さは300語以内とする。要旨、Abstractの中では行を変えたり、図・表・文献などを引用したりすることはできない。

キーワード・Key words

内容を適切に表す語句を5つ以内で日本語と英語の両方で記す。

本文

本文下端中央にすべて通しページを打つものとする。本文の区分けと見出しは、下記の例に従うこと。

- I. はじめに
- II. 調査地および方法
- III. 結果
- 1.

(1)

IV. 考察

写真・図など

原稿は、原則として、写真や図も大きさや濃度も考慮してページに挿入し、そのキャプション(タイトル・表示)も付した、版下状態(カメラレディ)に仕上げて提出する。番号は、図1. 写真1. のようにし、キャプションは和文と英文を併記する。

脚注

脚注はなるべく用いず本文中に記す。どうしても必要な場合は*、**、の記号で示し、原稿の最後か項の最後に記載する。

生物名・単位など

生物の和名は片仮名書きとし、学名はイタリックとする。なお、学名以外のものは本文中では原則としてイタリックにはしないものとする。単位はメートル法(MKS単位)による。

文献の引用

本文中での文献の引用は、次の例に従う。また、3名以上の報文(和文)については「・・・ほか」、英文については「・・・et al.」とすること。

(山田, 2010) (山田・田中, 2010) (山田ほか, 2010) (Yamada & Tanaka, 2010) (Yamada et al., 2010)

引用文献

引用文献は、著者名のアルファベット順に記載することとする。同一著者名、同一発行年の場合は、a,b順で区別する。記載方法は下記に従う。

<論文からの引用例>

Askin, R.A. Philbrick, M.J. and Sugeno, D.S. (1987)

Relationship between the regional abundance of forest and the composition of forest bird communities. *Biological Conservation* 39: 129-152.

Erdelen, M. (1984) Bird communities and vegetation structure. 1. Correlations and comparisons of simple and diversity indices. *Oecologia* 61: 277-284.

鈴木邦雄 (2007) 環境コミュニケーションに関する考え方. *自然環境復元研究* 3(1): 1-2.

井上幹生・中野繁 (1994) 小河川の物理的環境構造と魚類の微生物環境場所. *日本生態学会誌* 44: 151-160.

<単行本の引用例>

Forman, R.T.T. (1995) *Land Mosaics*. 436pp.

Cambridge University Press, New York.

鈴木邦雄 (2006) *マネジメンツの生態学*. 304pp. 共立出版, 東京.

<単行本の一部からの引用例>

永松大 (2008) 地形と実生の関係がもたらす森林の構造・
森の芽生えの生態学 正木隆(編), 47-64. 文一総合出
版, 東京.

Stow, D.A. (1993) The role of geographic information
systems for landscape ecology. *Landscape Ecology
and GIS* (Haines-Young, R.D. Green, D.R. and
Cousins, S.T. eds.), 11-21. Taylor & Francis, London